

## 三度保科正之の勤王に就て

本村 定三

醍醐桃山の華かな春も過ぎ。世は何時しか、江戸の若葉薫る時代とはなり、武家制度も定まり、文致の道亦漸く開かれて、隠元の禪味・程朱の道德等、人心を更新するに足るものが輸入された。而かも時代思想の曙光としては、教神尊王の念が萌え初めたことが、徳川史に於ける唯一の誇であつた。就中異彩を放つたのは、光圀の尊王である、されば一代の文豪の筆にも、

元來朱子學を徹底的に研究すれば、大義名分論や、王霸正閏論や、夏夷差別論が、必然の結果として出来るものだ。……伯夷傳が光圀の生涯に、一轉回機の花となつた、刺激となつた、然かも伯夷傳なきも、光圀は光圀だ、……但だ伯夷傳によりて、彼自ら感激し、其感激が思ひがけなき、偉大な感化を、後世に及ぼすに至りたるを多とすべしだ。……彼は君臣の大義名分を、極めて徹底的に理會した、彼は日本を以て、天皇の國と認めた、將軍を首めとして總て日本國民は、皆天皇の臣民であることを認めた、……云々。

と記し、且つ光圀と正之は、當時の好個の對照評論的であつた。一は吳の秦伯を崇拜し、他は陽武放伐論に反對した、兩者には緩急の差はあつたにもせよ、何れも日本の國體論者であつたことを認めて居る。

唯如何にも遺憾に思ふのは、正之の家訓十五條に論及する時は、第一條の「大君の義」を直ちに將軍と解し去るのが一般の定論であり、其解明の引例には必ず千載の松が用ゐられるのだ。然り千載の松は會津藩士大河原長八が、上津公事實、行狀記、言行錄等、確實な史料より編著せるもので、正之傳としては尤も信憑し得るものである。故に公言行錄を読む者は、皆正之を幕府擁護派の第一人者とするに至つた、又事實將軍の後見者、幕府擁護の筆頭であつた。然るに予は、千載の松は若干の疑雲を生じたのは、成程確實な根本史料に基いたとは云ふものの、是は文取年間の編述であるから、其編者の脳裡は、必然的に徳川謳歌者であり、其筆鋒は知らず、幕府中心となつたであらうが、彼の正之時代には、未だ謳歌どころか、徳川政府に取ては、實に油斷のならぬ時であつたから、其思想の表明は勿論、其文章用語にしても、相當に意を用ゐねばならなかつた。正之の精神を解剖して、其真相を捉ふることの困難は、慥かに其點である。特に公には、數回思想の變遷があつたから、一層困難となつた、唯幸いに氏興は此の近親者として、其邊の消息には精しかつたから、彼の言には信憑すべきもの多いのである。即ち

扨、延寶年中察鑒の義に就き、公事奉行共、固く先例を執て課せし時に、家老友松勘十郎氏興申せしは、其許共は先例を固く引け共、土津公は裁斷の事たりとも、初年、中年、末年によりて漳あり、聖人も幼年、中年、晩年にて行跡同じからず、義精仁熟と申すは、聖人と雖も晩年の事なり、初年には義も精しからず、仁も熟せざるの君あり、土津公の御處置にても、御若年の時仰出されし事は、當時吟味の上用捨すべしとて、細かに教示せし由、山崎闇高の御行狀に、不感に及んで學正しく、而かも徳成るとも記し置く云々。

是は、法律的裁の決場合であるが、家訓を學ぶ時にも、見通してはならぬ點である。

○  
正之は光圀以上に、徹底した朱子學派であつたことは、曾て論じた通りであり、其伯夷の精神に私淑した事は、湯武放伐論中に見え、又家訓の精神が其端を是に發して居ることも明かだ、されば家訓に就ては、幾多後人の解釋よりも、直ちに作者及加筆者の眞精神に觸るゝのが當然である、即ち千載の松よりも、友松氏與の家訓性、及儒者、遠山爲章の土津家訓指歸、松本新藏の家訓和解を讀破すべきである、不幸にも、後者は久しく世に埋れ、特に松本注は、會津藩著書目録にも洩て居つた。

されば多少重複の嫌はあるが、今、友松・遠山二子の分を一括して學ぶこととする、（友松の注は、本誌二卷第二號に記せし故省略す）、文中特に大君の説明は試みて居らぬが、盛に伯夷を推賞する所に、公の心中が、知られる、されば、

子孫若し二心を懷かば、面々決して従ふべからず。

の一句は、特に氏與が熟慮の結果であるとして、後々までも賞揚せられたものである、又文中に、近世板倉某云ふ、我若し不軌を謀らば、急に我首を斬て、以て幕下に獻ぜよ云々、是を直ちに、將軍に對する行爲とのみ解し去るが、實は皇室に對するものと信ずる、其理由は、重矩の言行録——源忠公御常行記を讀めば、能く氷解するのだ、其大要は、板倉重矩、重任を帯びて將に上洛せんとせしが、將軍より……京都の仕置心の儘に可仕旨仰出され、又家上の道中法度も、仲々嚴重に相達して、將軍の權威を其儀に振舞ふた、其一例は、大津代官の接待が意に充たぬとて、強く之を面責し、又桑内拜謁の節、強て御簾を捲かしめたなど、特に後者の場合の如き、皇室に對し奉り、餘りに不謹慎な行爲である。

拾遺家乘に、

一如此一日に禁裏、仙洞、本院、女院、御所拜禮相濟み、天盃を頂戴は、是れ武士の面目、希代の例也と云々は天子の御政直にして公方の御威光輕からざるに依りて、重矩、又時に逢ふて冥加に叶ふの由、世人之を唱ふ。とあり、亦以て當時の様が推知せらるゝが、是は決して賞讃すべきことではない、斯る場合とて、萬一野心又は驕慢心の生ずるあつて、其使命を誤たぬとも限らぬから、其赤心を吐露したのが、計らずも彼の不軌を謀らば、の一語となるのではあるまいか。

是に比して、正之が將軍名代としての上洛にも、

聊かも華奢なる服飾をせざる様、御供の輩へ仰渡され、何れも質素なる出立にて御供せしとぞ、とありて、雪に質素のみでなく皇室に對しての恭敬な態度は、曾て記せる通りで、彼の姉君東福門院が懷しさの餘りに、對面をと仰出されても、之をすら拜辭して、よく骨肉の親にほだされずに、君臣の禮讓を正されたから、一史家が正之は天皇を伊勢太廟の御延長と尊んだと記した位だ。斯く公と重矩との心事には、相當の懸隔があつたから重矩が湯武放伐意見を公に質した時も、文王伯夷をのし興良師とし手本として充分なりと答へた。

○  
爲章は氏注を布衍して、

僕按するに、此章の旨、氏與其旨を得たり、君にして此を守らば、則ち能く其國を全うし、臣にして此を知らば、

則ち能く其耻を免れん、況んや、公は 大君幕下の懿親なり、常に天下と休戚を同うす、豈に列國の比ならんや、今此訓を遺して、以て之を無窮に傳へんと欲す、嗟仁なりと云ふべし。

更に、彼は其の結尾に注して、

僕謹んで、竊かに總論して曰く、天に二日なく土に二君なし、故に上公侯伯長より、下卿大夫諸士に至るまで、皆當に其上と榮榮を共にし、休戚を同ふして、一毫も武心なかるべし、則ち是天理の自然、人情の已まざる處、況んや、幕下の懿親なるに於てをや、（丸山抱石翁は、幕下の懿親の句に加筆して、「朝廷之懿親者」とせり、）靈戒第一條、正に此が爲に起て、君臣の分斯に於てか定まる、抑も土地は人君の私有にあらず諸を 人君に享けて、諸を人民に養ける、若し欲を縱にし度を破り、下をして安からざらしめば、則ち付界の重きと忠勤の意其之なきを奈何せん（中略）。

僕靈神の王目に於て、豈其彷彿を窺ふに是らん、然れ共、世に其祿を食み其恩を渥うし、親しく其側に侍べり、而も其徳を仰ぐ是を以て神在さずと雖も、思慕感懷の意、竊かに自ら已む能はず、聊か其一二を論じ、追て區々の誠を致す、讀者我が裏悃を憐んで、而かも言の不逮を捐るなかれ。

會津源公仕士 遠山 爲章 論謹

更に、林鳳岡は之に序して、

古に曰く、忠は令徳たり、學は乃ち國華なり、誠なる哉斯の言や、會津中將源公は、當時の懿親にして、輔臣の棟梁なり、平生唯忠を心となし、暇日學を好み徑を談じ理を説き、古々稽ひ今を訂して家訓十五件を作り、厥の

孫謀を貽して以て鑑金に換ふ、原るに、夫れ三代の隆なる皆訓謨あり、其轍を追ひ其法に倣ふ者か、近臣遠山爲章、公の言を揭示して、之か註説を爲し其旨趣を發く、其書たることを顧るに、開始は忠勤士を選び兄弟に友なり、婦女を遠くるの事を載せ、中に風儀を勵まし賄媚を廢し、便佞を戒め善惡を擇ぶの事を載せ、終に利害を論じ社會を建て、驕榮を禁ずる事を載せたるなり。嗚呼公は、其所謂官を受くるの目主を以て父と爲し、國を以て家となし、士人を以て兄弟となすの人乎。謂つべし、國家を安じ民人を利して、其難を避けず、其勞を憚らず、以て其義をなすものなり。太原の王氏が家傳漢南の庾氏が家傳、江左の王氏が家傳、熒煌の張氏が家傳、汾陽王の家傳は、身大任に膺て子孫を教育す。然れ共、卷帙重大にして得て精通し難し、未だ此書の、要にして而かも約に、利にして而かも益なるに如かざるなり。豈に一家子孫の美を濟すのみならんや、列侯傳て此言を暗んずる時は、則ち必ず其身を安じ其國を保つ、内に忠心を懷き外に國華を發かんか、因て之が序を作る。

元祿十二年己卯夏六月上旬

國子祭酒 整字 林 憲 識

爲章が結論して、天に二日なく土に二君なしと云ひ、第一條は正に是が爲に起草せるもの、君臣の分此處に定まる是を大君に享けて是を人民に養はると云ひ。又鳳岡が、公は官を受くるの目主を以て父となし國を以て家となすと云ふが如き、何れもよく公の心事を語るもので、決して漢學者輩の文飾ではない（大君の用語の説明は前）

○

松本新藏も、亦會藩の儒者である、彼は博學多識詩文に長ぜし爲め、徳翁公特に學資を給して京都に遊學せしめ、後二百石を錫はつた位で、藩唯一の古典職源の識者であつた。彼は家訓を和解する理由を記して、

此御家訓の儀は、他家にても殊外に崇敬し奉ると存申候、其仔細は、私在京仕候節八尾八兵衛と申す者本屋、膳所の御家中より頼まれし由申し、此御家訓十五ヶ條、至極宜しき紙を折手本に仕り、玉置流の至て見事なる手跡を以て寫し候を、馬塗堅地の箱に入れ、私會津儒者に候得ば、續は法宜しく辨へ罷在べく候間、點を付け呉れ候様にと申遣し候、其寫本に直に點を付候儀、甚だ不禮に存候に付、別に寫し以て、私御前に於て拜讀仕候通り、點を付け遣し申候、其時承り候に、他郡にて手跡の指南仕候者は、世に會觸れ候庭訓今川杯の様に、手本に認め教え申候、誠に以て難有御名文と奉存候、畢竟此御家訓の儀、土津様、山崎嘉右衛門に仰付、思召の形嘉右衛門筆を立て差上候を、數度御直に御改正被遊候上にて出來仕候由、其寫本嘉右衛門家に在之、没後自然と世上に流布仕候哉と奉存候事。

一嘉右衛門弟子、殘見重次郎（綱齋）と申す博學大方の儒者のうへ、守りも立てたしか成者に有之、存生の内は私在京仕候節度々參仕候て申候は、日本 神武帝、應神帝の外、大職冠鎌足公、源賴光・賴義、義家、賴正成、細川頼之杯、何れも勝れたる案にて、國をも治められ人も懷き申候得共、悉く霸道のなりと相見え申候。

土津様のごとく、孔孟程朱が大中至正の御學父遊ばされ、六十餘州の大政を御握り成され、今以て津々浦々迄御恩澤を蒙り申候、個様な賢君は、日本始まり御一人と申候ても、不苦候由、誠に以て御譜代の者共、雖有仕合に可奉存儀に御坐候。

是を讀む時、彼が此訓點語註を依囑せらるゝに適任者であり、特に其交友淺見綱齋の如き尊王家が、公を評するに霸道の人でない斗りか、個様な賢君は、日本始まりての御一人と申候ても、苦しからず候との讃辭を呈して居る。

是が彼自らの抱いた正之觀であるとするならば、「大君」の二字を解するに、有利な證言ではあるまいか。

松本は本文に註して、

大君の二字、易の履の卦より出でたり、中華にては多くは天子の事を申候、日本にては近來 公方様の御事を申奉る、（木村曰く、本註は元祿年間以後であり、「近來」の二字に留意すべし丸出抱石は、本註の「日本」及「公方」の字の上に張紙書入して非なりと記す。）

土津様、御高意の趣、御子孫の御一心御大切に忠勤を御勵み遊されべく候、脇々の御大名様方の御身持は、決して遊され間敷候、若し數百年の後、御公達に御二心の御子孫御出なされ候はゞ、御子孫とは御思召されず候、御家老の面々不可從、決而の二字眞に以て重き思召に御坐候、此段先づ御家老友松勘十郎發明仕、文章に認め置候模様、土津様の御儀、深く三綱五常の儀御心を被置、古今忠義の第一人伯夷を御學び被遊、微塵たり共忠の御心御怠り不被成候、近代板倉周防公、御家來共へ被仰聞候は、我身取違謀叛の出來せば、則ち急に此首を刎て、幕下に献すべしと、其御心は忠に相聞え候得共、土津様のことを御學文無之候に付、仰聞られ候御言葉は、道理に違れ申候、如何に主君の御意なればとて、御家來其御首を切り申候はゞ、其者又臣の道を失ひ申候、然る處、土津様御家訓に、若懷二心則非子孫而々決而不可從と、至極御尤なる御意、周防君の仰とは雲泥萬里に在之候、實に此段勘十郎發明仕候事、此勘十郎献上の仕候、本文は則ち書き認む。

彼は其卷尾に、友松の漢文略註をも記しつゝ、其感想を附記して。

實に、土津様には、孔孟程朱の道學相渡候以後も、鹵旨を御極め被遊、是を御躬行御發き被成、眞に大賢と可申上候、上は王公より下匹夫に至るまで、御當代の御一人と、其御大德を奉賞候由、眞に難有儀奉恐悅候、二程治教録、伊洛三子傳心録、玉山講義附録の御編集候書、甚だ後世學者の爲に被成候。世に語り傳申候、信州諏訪の湖水、必ず冬は氷厚く張り、何様の大石大木を引候ても怪儀仕事無之候、他天下に大凶事有之節は、氷ははり不申候、たとへば天草陣の前の年、又江戸大火焼死の者拾萬人、無縁寺の出來仕候前の年杯は、氷強くはり不申候よし、土津様御逝去の前の年、氷はり不申候に付、明年は何か凶事天下に可有之旨、世上何となくひそめき候處其翌年何事も無之泰平に在之候處、土津様御逝去被遊候、依之日本國中の天神地祇も、古今無双大德の土津様の御逝去を悼み、世上へ御示しと相見え申候、實に左様にも可在之候。大賢朱子死去の夕、天下大風大雨仕候由、則ち其高弟勉齋黃、此吾人の葵山足徒哉と、朱子の行狀にも末に被書候事。

三家士の註は、何れも公の誠忠を表明するに、伯夷に學びたるを以てし、特に決して従ふべからずの意味深長なる誠告は、光圀の勤王精神に劣らざるものがある。

叙し來て予が心には、當時大君の二字は、未だ後代程に、將軍に對する代名詞とせられて居らぬと思ふ。而かも朝鮮使節の場合寛永十三年將軍に對して、大君の敬稱を用ゐしめたところがあるが、是は稀に往復する公文書の事で、未だ一般的用語ではなかつた。されば新井白石すら、大君の稱に對して疑義を抱いて、

彼思ふに、鎌倉以後諸外國が其國書に、天子を稱して日本天皇、幕府を日本國王と稱せり、然るに寛永以後、我政府より將軍を指して、日本國大君と稱するが如きは誤である、元來朝鮮にては、大君をば王下の稱なれば、

將軍を大君と稱するが如き、彼より官職を受くるの嫌あり、且つ大君とは、天皇の異稱なる由異書にも見えて、本朝の天子の御事にも疑はるゝ故、宜しく以前の如く、日本國王と記し參らすべしとて、遂に朝鮮に交渉して、大君を國王と改むるに至つた。然るに雨森芳洲等は、之に對しても異議を挿みて、大君の稱すら穩かでないのに國王と改むるとは更に不穩當だ、由來將軍が王と稱せざるによりてこそ、僅かに臣下恭順の大節を存するものと。

白石の當時既に然り、されば松本註に「近來公方様」をと、軽く取扱て居る理由も想起せらるゝではないか、予が屢繰返せる如く、此家訓は、公一人の作制でなく、惟足、闇齋、氏典に負ふ處の大なるを思はるゝから、決して後代の俗論に動かされて公を誤つべきではあるまい。猶此外に、予は闇齋の起艸の、土津公碑文に對する、從來の解釋にも疑問を抱くのである。即ち

崇道盡敬、天皇以後一人のみ、其君に事ふるや、大義常に心に存す。

の二句に對して、多くの人が「天皇以後一人のみ」の句を以て、敬神の大家と賞揚しながら、「其君に仕ふるや」の句をば切離して、將軍に仕ふる忠義心と解し去るのである。爲めに此處にも亦正之に對する、先入主の誤解を生ぜしむるが、元來此二句は續けて讀破すべき者で、天皇以後……君に仕ふる云々の字句は、當然敬神尊王の第一人者と解すべきである、撰者闇齋が、此偉人を百世の後に傳ふるに當りて、誤り易き文體を用ゆる筈はないことは、前の綱齋の一語にても、推知せらるゝではないか。

○

公の終まで愛讀したのが朱子語類、延平先生の太極説であつた、西銘の如きも其一であるが試に朱子の西銘解及朝鮮の李退谿考證講義録を讀む時には大君の出典と意義を明にするのである。

西銘に

乾坤父坤稱母予茲藐焉乃混然中處。故天地之塞吾其體天地之帥吾其姓。民吾同胞物吾與也。大君者吾父母宗子其大臣宗子之家相也。

とあり朱子之を解して、

乾父坤母而も人其中に生れば則ち凡天下の人皆天地の子也、然るに天地を繼承し、人物を統理するは則ち大君のみ、故に父母の宗子となす、大君を輔佐し衆事を綱紀するは即ち大臣のみ、故に宗子の家相となす。

李退谿は更に此朱子解を考證して

大君。

易の師の卦に大君有命。大君とは天子を指すの言也。

と明記せり是は松本新藏の註にもある通りで、疑もたく支那の皇帝を指し日本にては天皇に外ならぬ、夫れを朝鮮の用語に王族を大君と稱したからとて之を模する筈がない白石の議論などの生じたのも夫である。

而も此李退谿の註釋は寛文八年春京都に於て上木せられて居る（家訓は同八年四月の作成）

○

最後に一武の逸語を附記しよう。夫は寛文七年三月の事である。

筑前守正經が、會津下向の爲暇乞にと、芝郎に赴かれし時、公は手づから、逍遙院詠歌の中より、

身はふりぬ行末遠くつかへ

子と思ふ道も君をこそおもへ。

雲井にもきこえさらめや仕ふべき

道をゆづるの子を思ふこそ。

わすられぬ親のいさめの言の葉は

しのぶの露のおきどころなる。

と、寫書して贈られた。又

寛文十二年、公の最後の會津に下向せられし際、八月五日正經、參勤出府の日も間近いので、送別の内宴を三の丸に催され、重臣井深茂右衛門、柳瀬三左衛門、友松勘十郎、菅勝兵衛、小原五郎左衛門も陪席した。やがて儒者齋院春意に、家訓拜讀を仰付けられて、公自ら毎條の趣意を解説なされ、叮嚀反復して教諭があつた、此儀終て後、侍坐の者を退けて、唯井深、柳瀬、友松の三家老のみを屏残らしめ、靜かに其性格の長短を注意せられた。是には藩の前途や其他に、考慮すべき事があつたからだ、其際井深は得心參り兼ますとて、種々辯解に及んだので、良藥を與へても用ゐざるものは、其驗なきものと仰せられて、頗る不興であつた。

斯る消息は、亦以て公の心事が惻度せられて、營に藩内の政治文教のみでなく、天下國家の大事が、念頭を離れぬことを知り得るのだ。

○

予が斯くも、三慶同一問題を提て論ずるが爲に、文の重複したことを感するが、少くとも取扱はんとする史料は相當意を用ゐた積である。

されば此等を綜合する時は、必然的に公は佐幕の頭目と見做さるゝ以上に、尊王の念の勃々禁ぜざるものがあつたと信ずる。唯會津には所謂會津學派をなす程の人材が輩出せず、又大日本史に比較すべき大文献がなかつた（長井定宗の・本朝通紀五十五卷の如きは、餘りに小著である）、爲に公の偉志が埋れ終つた。

若しも會津に傳はりたる唯一、垂加兩神道家に、初代の人々の精神を、充分繼承發揮し得る人物であるか、又藤樹の正統流たる淵岡山の流が、より深くより廣く流れたなら、彼の日新頼の教育に、又會津魂に一段の光を加へ得たものと、今更の如く遺憾である。併し公を中心としても、少し當時の思想界を探る事と、永く忘れられ居る理學神道に新しく考慮を費す事の如きは、光國研究と同様に、價值ある事と信ずる。